

八郎潟干拓地におけるゴイサギの新集団営巣地

Ecological study of New Colonies of Night-Heron
in Hachiro-gata reclaimed Land, Akita Prefecture.

高橋 一郎*

Ichiro TAKAHASHI

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax nycticorax* に関する報文には、川口 (1930), 松山 (1932), 小杉 (1960), 渡辺 (1977), 渡辺 (1982), 飯村 (1985) などがあり、本種の繁殖生態および他のサギ類との種間関係などについて論じている。秋田県における本種の集団営巣地としては、比内町, ニッ井町, 山本町, 秋田市, 雄物川町などが知られているが、繁殖生態に関する調査はほとんど行われていない。

筆者は、1985年6月8日、南秋田郡大潟村総合中心地において、防災林であるクロマツ林に営巣する本種を認めた。1984年以前に営巣したという形跡や営巣にかかわる情報が得られなかったことから、1985年に新しく集団営巣したものと考え、繁殖生態に関する調査を実施した。1985年は約100巣を、翌1986年は営巣数を増したことを確認したが、1986年5月末日、人為的に巣が破壊される事故があり、ほとんどのつがいは繁殖を中断した。しかし、この営巣地を離れた集団の一部が、間もなく同じ総合中心地の南部にあるクロマツ防災林に営巣を開始したので、最初の営巣地に残留した集団と合わせて調査することができた。その結果、新集団営巣地における本種の営巣状態について、若干の知見を得たので、ここに報告する。

起稿にあたり、助言および校閲をしてくださった秋田大学教育学部教授小笠原島博士、調査に同行し資料収集に協力くださった秋田県野鳥の会会員大潟村堤朗氏、営巣木調査に平板測量をもって協力くださった秋田県立博物館学芸主任庄内昭男氏、数値計算に協力くださった秋田県立博物館学芸主事佐々木厚氏に対し、心からの謝意を表したいと思う。

1. 調査地の概要

秋田県南秋田郡大潟村は、男鹿半島東部に位置し(図1)、琵琶湖に次いで第2位の広さをもった八郎潟が干陸され、1964年に誕生した。その結果約13,000haの広大な農耕地が新生したほか、干拓地中央部から西よりにある総合中心地には、役場・公民館・学校・商店をはじめ、約950戸の住宅などが建設されている。また、干拓地には、承水路・排水路をはじめ、かつての5分の1に相当する調整池が水域として残されている。

ゴイサギの最初の営巣地(第1地域)は、村内総合中心地の住区を画する防災林にある(図2)。この防災林は、樹高約6m、胸高直径約10cmのクロマツで構成されているほか、南側林縁部には2~3列にセイヨウハコヤナギが植栽されてきている。東西に帯状に列する防災林の北側は、小水路を狭んで運動広場があり、南側は、道路を狭んで住宅地になっている。

1986年6月上旬に第1地域から分離した集団が求めた営巣地(第2地域)は、村内総合中心地南部の幹線道路沿いの防災林にある(図2)。この防災林は、第1地域同様のクロマツで構成されているが、樹高が約10m、胸高直径約15cmと第1地域に比し大きく、植栽年が早かったことを示している。南南西から北北東に帯状に列するこの防災林と幹線道路の間には、小水路とさらにもう1列のクロマツ防災林がある。当地の東側は、大潟村農業協同組合の自動車・農業機械の整備工場および農産物貯蔵庫が散在するススキ草原になっている。

なお、高橋・堤(1986)が報じているように、1986年、アカガシラサギ1つがいが、この第1地域のゴイサギ集団営巣地内で確認されている。

*秋田県立博物館

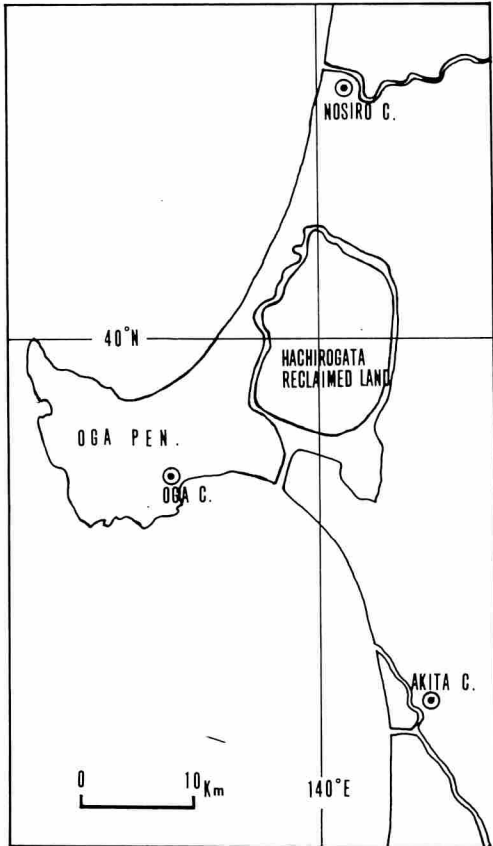


図1 八郎潟干拓地(大潟村)付近略図

2. 調査項目および方法

(1) 巣の分布状態

巣は、林外からの確認が困難であるため、林内に入り直接数える方法をとった。調査は、繁殖を終え、林内にもどらないことを確認した秋季に行った。これは、営巣年内であれば、巣材が残留しており、容易に営巣位置を確定できるからである。また、巣の分布図作成の必要から、営巣範囲のすべての立木位置を測量した。

(2) 営巣位置

営巣木の樹高と地表から巣までの高さ(巣高)は、繰り出し式の釣竿や測定尺を用いて実測した。また、樹木における営巣部位は、肉眼により観察した結果をそのまま用いた。

(3) 繁殖つがい数の推定

1本の営巣木には、1~3個の巣が認められるため、営巣木番号とは別に巣番号を定めた。地域内の繁殖つ

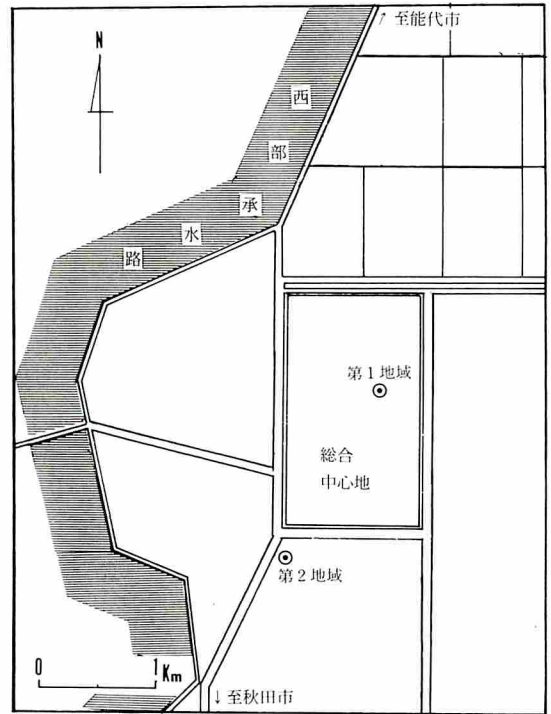


図2 ゴイサギ集団営巣地付近略図

がい数は、この巣数を基本にしたが、完全な巣であっても途中で放棄したつがいがあるとすれば、正確なつがい数にはなり得ない。そのため、林外から観察した成鳥および亜成鳥数を随時採用し、繁殖つがい数の推定値とした。

3. 結果

(1) 巣の分布状態

第1地域があるクロマツ防災林は、南北に約20m 東西に約200mの帯状をした区画になっている。営巣地は、この区画の東側に位置している。第2地域があるクロマツ防災林は、東西に約21m 南南西から北北東に約250mで、その北端からさらに東側へ続く1区画である。営巣地は、この区画の南側に位置している。第1地域(1985)、第1地域(1986)、第2地域(1986)の立木および営巣木の分布状態は図3に、第1地域(1985)および第2地域(1986)内に設定した各方形区における巣数は図4に示した。図4から第1地域(1986)を除いたのは、前述のように、1986年5月末日の事故

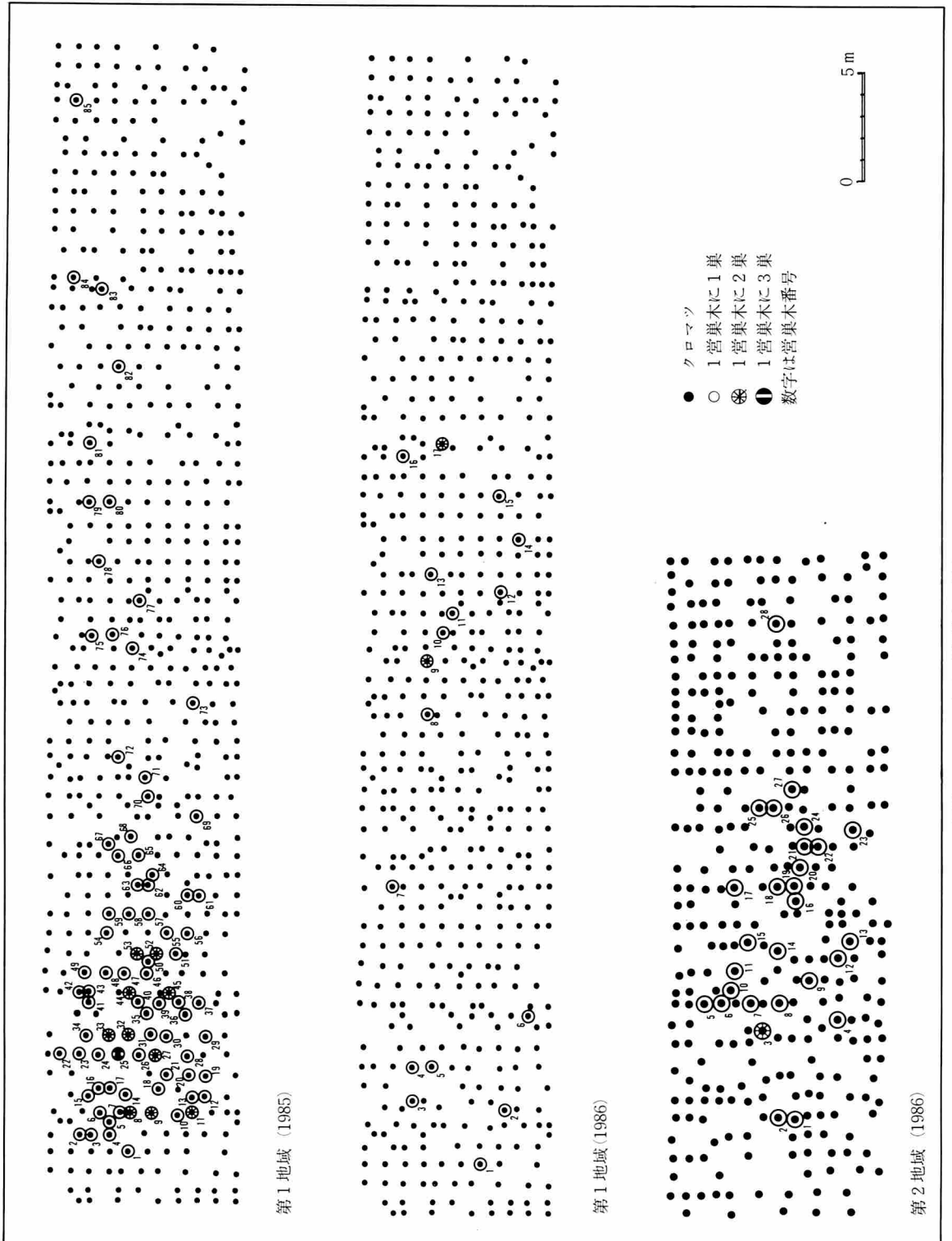


図3 クロマツおよび営巣木の分布

44	37	7	5	1	0	0	0	0	0
----	----	---	---	---	---	---	---	---	---

第1地域(1985)の各方形区(20×20m)における分布密度(数字は400㎡あたりの営巣数)



第2地域(1986)の各方形区(21×20m)における分布密度(数字は400㎡あたりの営巣数)

図4 各方形区における分布密度

表1 1樹あたりの営巣数とその割合

	1木1巣	1木2巣	1木3巣	計
第1地域(1985)	74本(87.1%)	10(11.8%)	1(1.1%)	85本
第2地域(1986)	27(96.4)	1(3.6)	0(0)	28
計	100本(89.4%)	11(9.7%)	1(0.9%)	113本

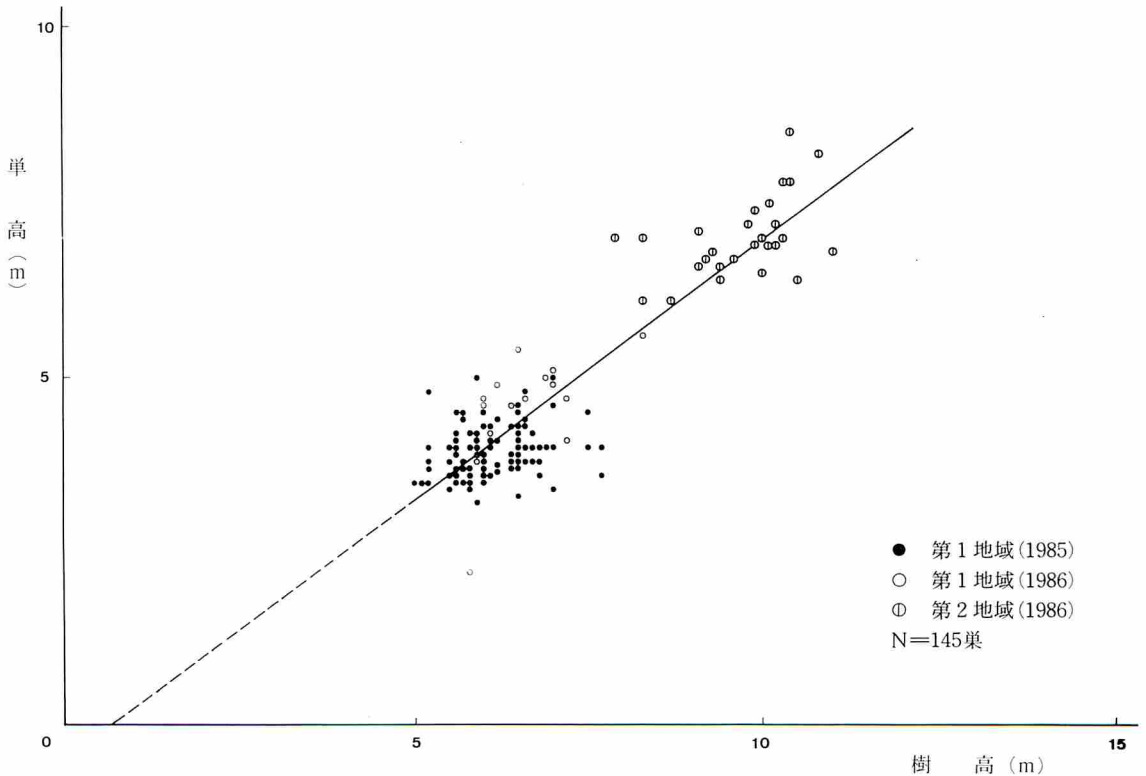


図5 巣高と樹高の関係

八郎潟干拓地におけるゴイサギの新集団営巣地

表2 営巣木と営巣位置

表2-1 第1地域 (1985)

営巣木番	巣番号	胸直 高径 cm	樹高 m	巣高 m	巣高/樹高	営巣位置	営巣木番	巣番号	胸直 高径 cm	樹高 m	巣高 m	巣高/樹高	営巣位置
1	1	10.0	6.0	3.5	0.58	A	42	50	8.0	6.0	3.7	0.62	B
2	2	11.5	6.5	4.2	0.65	B	43	51	7.5	5.8	4.2	0.72	B
3	3	8.0	5.7	3.5	0.61	B	44	52	8.5	5.9	5.0	0.85	B
4	4	10.5	6.2	4.4	0.71	B		53			3.9	0.66	A
5	5	11.0	6.2	3.7	0.60	A	45	54	9.5	6.0	4.5	0.75	B
6	6	8.0	5.9	4.0	0.68	A		55			3.9	0.65	B
7	7	6.0	5.8	3.6	0.62	B	46	56	7.0	5.6	4.1	0.73	A
8	8	9.5	5.6	4.8	0.86	A	47	57	11.0	6.8	4.0	0.59	A
	9			4.0	0.83	B	48	58	10.5	6.7	3.8	0.57	B
9	10	15.0	7.7	4.0	0.52	C	49	59	9.5	6.5	3.9	0.60	B
	11			3.6	0.47	B	50	60	13.0	6.0	3.7	0.62	B
10	12	13.0	6.5	3.7	0.57	C	51	61	8.5	5.6	3.7	0.66	A
11	13	9.5	5.2	4.8	0.92	B	52	62	7.5	5.6	4.5	0.80	B
	14			3.5	0.67	B		63			3.7	0.66	B
12	15	10.5	6.5	4.1	0.63	B	53	64	13.0	6.5	4.3	0.66	A
13	16	9.0	5.5	3.8	0.69	B		65			3.3	0.51	A
14	17	6.0	5.1	3.5	0.69	A	54	66	10.5	6.7	4.0	0.60	B
15	18	8.0	5.8	3.5	0.60	B	55	67	10.0	6.1	3.6	0.59	B
16	19	14.0	6.5	4.0	0.62	B	56	68	8.5	5.9	4.1	0.70	B
17	20	11.5	6.5	3.8	0.59	A	57	69	7.5	5.6	3.9	0.70	B
18	21	9.0	5.8	3.7	0.64	B	58	70	13.0	7.0	3.4	0.49	B
19	22	10.2	5.7	3.8	0.67	B	59	71	8.5	5.8	3.6	0.62	A
20	23	10.5	5.7	3.8	0.67	A	60	72	10.5	6.8	3.8	0.56	B
21	24	7.5	5.5	3.6	0.66	B	61	73	12.0	6.9	4.0	0.58	B
22	25	15.0	5.9	3.2	0.54	A	62	74	10.5	6.4	3.9	0.61	A
23	26	9.5	6.7	4.2	0.63	A	63	75	8.0	5.9	4.1	0.70	A
24	27	11.0	6.5	3.7	0.57	B	64	76	7.5	5.6	4.2	0.75	A
25	28	13.5	6.4	4.3	0.67	B	65	77	11.0	6.5	4.6	0.71	B
	29			3.7	0.58	A	66	78	10.5	6.5	4.6	0.71	A
	30			3.8	0.59	C	67	79	10.5	6.5	4.5	0.69	B
26	31	8.0	5.2	4.0	0.77	B	68	80	8.5	5.7	4.4	0.77	B
27	32	13.0	6.6	4.3	0.65	A	69	81	11.0	6.2	4.3	0.69	B
	33			3.8	0.58	A	70	82	12.5	7.5	4.0	0.53	A
28	34	8.0	5.5	3.4	0.62	A	71	83	9.5	6.5	4.7	0.72	A
29	35	10.0	5.8	3.4	0.59	A	72	84	13.0	7.0	5.0	0.71	B
30	36	13.0	6.0	3.6	0.60	A	73	85	9.0	5.8	4.0	0.69	B
31	37	9.0	6.0	3.8	0.63	A	74	86	7.0	7.5	4.5	0.60	A
32	38	10.0	5.6	4.5	0.80	B	75	87	13.0	6.6	4.4	0.67	A
	39			3.5	0.63	A	76	88	10.0	6.2	4.1	0.66	B
33	40	9.0	5.7	4.5	0.79	B	77	89	9.0	6.1	4.0	0.66	B
	41			3.7	0.65	B	78	90	8.5	5.9	4.2	0.71	A
34	42	10.0	5.2	3.7	0.71	C	79	91	8.5	5.8	4.0	0.69	A
35	43	8.0	5.6	3.6	0.64	A	80	92	8.5	7.0	4.0	0.57	B
36	44	6.5	5.0	3.5	0.70	A	81	93	9.5	6.0	4.3	0.72	A
37	45	10.0	5.5	4.0	0.73	B	82	94	9.5	6.1	4.1	0.67	B
38	46	10.0	6.2	3.8	0.61	A	83	95	8.0	6.5	4.5	0.69	B
39	47	5.5	5.2	3.8	0.73	A	84	96	9.0	6.1	4.3	0.71	B
40	48	10.0	5.8	3.7	0.64	A	85	97	10.5	7.0	4.6	0.66	B
41	49	8.0	5.6	4.0	0.71	A							
		平均		10.6	6.1	4.0	0.65						

表 2-2 第 1 地域 (1986)

営巣木 番号	巣番号	胸直 高径 cm	樹高 m	巣高 m	巣高/樹高	営巣 位置
1	1	8.0	5.7	4.2	0.74	B
2	2	9.0	6.0	4.6	0.77	B
3	3	11.5	7.0	5.1	0.73	B
4	4	13.5	7.0	4.9	0.70	B
5	5	11.0	6.9	5.1	0.74	C
6	6	7.5	5.9	3.8	0.64	B
7	7	14.0	8.3	5.6	0.67	C
8	8	10.0	6.5	5.4	0.83	A
9	9	7.0	6.0	4.7	0.78	B
	10			3.8	0.63	B
10	11	8.0	6.2	4.9	0.79	B
11	12	9.0	6.6	4.7	0.71	B
12	13	11.0	5.8	2.2	0.38	A
13	14	9.0	6.4	4.6	0.72	A
14	15	8.5	5.6	4.1	0.73	B
15	16	10.0	6.1	4.2	0.69	A
16	17	9.5	6.6	4.3	0.65	B
17	18	14.5	7.2	4.7	0.65	A
	19			4.1	0.57	A
平 均		10.1	6.5	4.5	0.69	

で巣のほとんどが破壊されたため、巣は間引かれた形になり、分布を知る資料にはならないからである。第 1 地域 (1985) は、営巣木数 85 本、営巣数 97 巣であった。図 3 により、分布状態は明らかであるが、図 4 に示すように、一応東側から順に幅 20m 長さ 20m の方形に区画すると、その 400 m² 中の巣数は、44 巣、37 巣、7 巣、5 巣、1 巣となる。これらの巣は、地域東端に密集し西側に分散している。第 2 地域 (1986) は、営巣木数 28 本、営巣数 29 巣であった。第 1 地域同様に方形区をとる (図 4) が、幅が 21m であることから、21 × 20m を設定し、その後 400 m² あたりの巣数を算出、比較した。その結果、南側から順に、3.8 巣、18.1 巣、4.8 巣、1.0 巣となり、当地域南端に偏って営巣しているのがわかる。

1 樹あたりの営巣数は、図 3 および表 1 に示した。第 1 地域 (1985) は、1 木 1 巣の比率が 87.1% (85 本中 74 本)、1 木 2 巣が 11.8% (10 本)、1 木 3 巣が 1.1% (1 本) である。1 営巣木に 2 巣以上みられた位置は、巣が密集する東端である。第 2 地域 (1986) は、1 木 1 巣の比率が 96.4% (28 本中 27 本)、1 木 2 巣が 3.6% (1 本) である。両地域の合計は、1 木 1 巣が 89.4%、1 木 2 巣が 9.7%、1 木 3 巣が 0.9% である。

表 2-3 第 2 地域 (1986)

営巣木 番号	巣番号	胸直 高径 cm	樹高 m	巣高 m	巣高/樹高	営巣 位置
1	1	12.0	8.3	7.0	0.84	B
2	2	15.0	10.8	8.2	0.76	B
3	3	18.0	10.4	8.5	0.82	B
	4			7.8	0.75	C
4	5	13.0	10.2	6.9	0.68	B
5	6	11.0	10.0	7.0	0.70	B
6	7	17.0	9.2	6.7	0.73	D
7	8	6.0	7.9	7.0	0.89	B
8	9	18.0	10.4	7.8	0.75	C
9	10	14.0	10.3	7.0	0.68	B
10	11	14.0	10.3	7.8	0.76	B
11	12	24.0	11.0	6.8	0.62	C
12	13	16.0	9.8	7.2	0.73	B
13	14	13.0	10.5	6.4	0.61	B
14	15	13.0	9.9	7.4	0.75	B
15	16	10.0	10.0	6.5	0.65	A
16	17	15.0	9.3	6.8	0.73	A
17	18	11.0	9.9	6.9	0.70	B
18	19	12.0	10.1	7.5	0.74	A
19	20	10.0	9.1	7.1	0.78	B
20	21	11.0	8.7	6.1	0.70	A
21	22	19.0	9.1	6.6	0.73	A
22	23	17.0	9.6	6.7	0.70	B
23	24	11.0	8.3	6.1	0.73	B
24	25	9.0	9.4	6.6	0.70	A
25	26	10.0	9.4	6.4	0.68	D
26	27	23.0	10.2	7.2	0.71	D
27	28	16.0	9.4	6.6	0.70	B
28	29	17.0	10.1	6.9	0.68	A
平 均		14.1	9.7	7.0	0.72	

ある。

(2) 営巣位置

営巣地は、干拓地であることから、起伏の少ない平坦な場所にある。しかも植栽されたクロマツは、ほぼ樹高の等しい林になっている。巣の高さは、表 2 に示すように、第 1 地域 (1985) が 3.2m から 5.0m、第 1 地域 (1986) が 2.2m から 5.6m、第 2 地域 (1986) が 6.1m から 8.5m である。しかしながら、前述のように、第 1 地域と第 2 地域では植栽年が異なり、林全体の高さにも差がある。そこで、巣高と樹高の間どのような関係があるかを知るため、表 2 に基づき図 5 を作成した。これによると、各地域毎の巣高と樹高の位置はまともっており、両者の相関も低い、総合すると比例しているように見え、かなり高い相関 ($r=0.904$) がある。

表3 営巣部位別の巣数とその割合

	A	B	C	D	計
第1地域(1985)	42巣(42.3%)	52巣(53.6%)	4巣(4.1%)	0巣(0%)	97巣
第1地域(1986)	6(31.6)	11(57.9)	2(10.5)	0(0)	19
第2地域(1986)	7(24.1)	16(55.2)	3(10.3)	3(10.3)	29
計	54巣(37.2%)	79巣(54.5%)	9巣(6.2%)	3巣(2.1%)	145巣
	133巣(91.7%)				

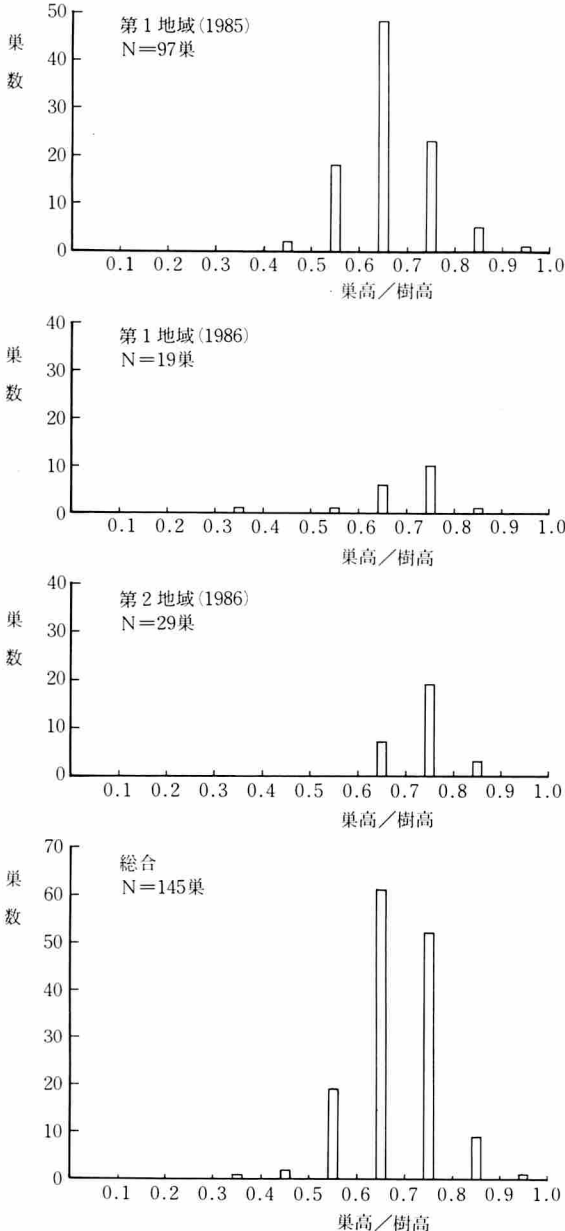


図6 樹高に対する巣高の割合(各階層毎)とその巣数

一応、最小自乗法により算出してみると、 $y = 0.747x - 0.479$ (y は巣高、 x は樹高)の数式が得られた。そこで、樹高に対する巣高の割合とその階層毎の巣数をみた(図6)。このヒストグラムによれば、(巣高/樹高)は、0.6から0.8の間に集まっており、平均値は0.68である。

樹木の営巣部位は、図7に示したように、4タイプに分類できる。各タイプ別の営巣数とその割合は表3に示した。その結果、幹と枝の叉部に営巣するAタイプは37.2%、Aタイプに類似するが、幹を抱くように2本以上の枝に跨るBタイプは54.5%、枝上であるCタイプは6.2%、幹が2本以上に分離したようにみえるその叉部であるDタイプは2.1%となる。AとBのタイプは、幹と枝の叉部であり同質であると解釈すれば、これらの合計は91.7%となり、ほとんどの巣が属することになる。

(3) 繁殖つがい数の推定

第1地域(1985)の営巣数が97巣であり、1985年6月10日、営巣地上空に一斉に飛び立った成鳥および亜成鳥の個体数が250羽士であることから、繁殖つがい数は90~100つがいであると推定した。1986年5月1日、同地域において同様の状態で数えた成鳥および亜成鳥の個体数は350羽士であり、確実に増加したとみていたが、前述の事故により二派以上に分かれた。その結果、第1地域(1986)の営巣数は19巣であり、第2地域(1986)のそれは29巣である。第1地域(1986)の成鳥個体数を確認する機会は失したが、第2地域(1986)は、1986年6月11日、70~80羽の成鳥・亜成鳥数であった。これらにより、若干の不備はあるが、1986年に両地域で繁殖したつがい数の合計は、50つがい前後と推定した。

4. 考 察

第1地域の巣は、東西に列するクロマツ防災林の東端に、第2地域の巣は、ほぼ南北に列するクロマツ防

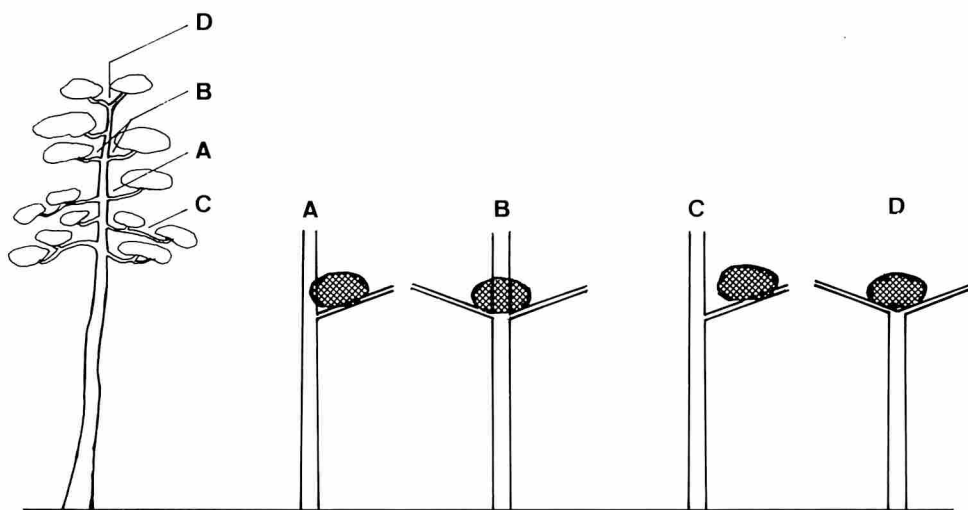


図7 樹木における営巣部位

災林の南端に、それぞれ集中している。これは、ゴイサギ、アオサギ、コサギの3種が混棲する集団営巣地(渡辺, 1977)やアオサギ1種による営巣地(OGASAWARAほか, 1982)が中央部を選択する傾向をみせるのに比し、異なる分布状態であるように思われる。第1地域、第2地域は、植栽されたクロマツ林という比較的均一な植生であり、ソデ群落もマント群落も形成されていない。また、両地域に共通する周囲の環境は、営巣地のそばに、巣を離れた雛が自ら採餌できる小水路があるほか、広い草地(運動広場、ススキ草原)が一方に広がっている。しかし、これらの状況は、この地域に、しかも一端に偏って営巣する確かな証拠にはならない。類似する環境は、村内の他地域に何か所も存在するからである。現時点で、営巣地選択の嗜好性を論じることは困難であり、今後の継続した調査と他地域の営巣傾向を比較調査する必要がある。

当集団営巣地においては、1営巣木に1個の巣を営む割合が89.4%と多く、ほとんどが1木1巣の状態といっていよい。渡辺(1977)は、スギに営巣する本種の場合、1樹あたり6.1巣と報じている。これと比較し、かつ、当地においても巣が密集する場所には2巣以上の営巣が認められることから、今後、個体数増加に伴い、1営巣木あたりの巣数がふえると考えられる。しかし、新集団営巣地である当地においては、営巣可能木が多いこと、クロマツ若令木であることから、1木

1巣の傾向が強くてたのであろう。

営巣位置について、倉田・樋口(1972)は、アオサギとゴイサギが混棲する場合、アオサギが高位置を占めるとし、渡辺(1977)もそのように報じている。これは、アオサギとの種間競争によるものなのか、本来ゴイサギは外部から発見困難である樹内部を選択する傾向にあることを示しているのであろうか。OGASAWARAほか(1982)は、アオサギ単一種の場合、樹冠もしくは枝先に営巣する傾向があるとし、渡辺(1982)は、営巣木の枯木化が進むにしたがい、アオサギは増加するが、ゴイサギとコサギは逆に少なくなると報じている。当地域の営巣位置は、樹高との相関が高く、樹高に対し約70%の高さに集中している。また、樹木の営巣部位は、幹と枝の叉部がほとんどであり、その割合は91.7%である。これらのことから、当地における本種の営巣位置選択の傾向は、やや高位置で、しかも枝葉が繁茂する樹内部であろうと考えられる。

当地域において営巣したゴイサギの繁殖つがい数は、1985年は90~100つがい、1986年は事故により分派したが、50つがい前後と推定される。この事故により死亡した成鳥が地域内に認められないことから、1986年には、少なくとも50つがい以上が他地域へ移動したか、繁殖を断念したと思われる。

要 約

1985年6月8日、秋田県南秋田郡大潟村総合中心地のクロマツ防災林に、新しく集団営巣地を求めたと思われるゴイサギ *Nycticorax nycticorax nycticorax* を認めた。さらに翌1986年は、前年と同地域（第1地域）に営巣したものの、1986年5月末日、ほとんどの巣が人為的に破壊される事故が発生し、残留した集団と村内総合中心地南部のクロマツ防災林（第2地域）に新たな営巣地を求めた集団、行方がわからなくなった集団に分派した。この第1地域と第2地域の集団営巣地における営巣傾向の解析および繁殖つがい数の推定を行った。

1. 本種は、両地域とも防災林の一端に営巣した。営巣数は、第1地域（1985）が97巣、第1地域（1986）が19巣、第2地域（1986）が29巣である。

2. 巣の分布は、高密度に営巣する区域から他方に分散している。

3. 1樹あたりの営巣数は、1～3巣である。その割合は、1木1巣が89.4%、1木2巣が9.7%、1木3巣が0.9%である。

4. 巣高と樹高の相関は高く、しかも、巣は、樹高に対し約70%の高さに集中している。

5. 樹木における営巣部位は、幹と枝の叉部がほとん

どであり、その割合は91.7%である。

6. 繁殖つがい数は、1985年は90～100つがい、1986年は両地域合計50つがい前後であると推定した。

引用文献

- 飯村 武, 1985: 三浦半島南部におけるサギ類の動態—問題になったコロニーを中心として—。神奈川県立自然保護センター調査研究報告, 2, 7—14.
- 川口孫治郎, 1930: ゴイサギの生態。鳥獣集報, 1 (4), 21—43.
- 小杉昭光, 1960: 数種のサギ科の鳥類の食性について。山階鳥類研究所研究報告, 2 (15), 89—98.
- 倉田 篤・樋口行雄, 1972: 三重県佐波留島におけるアオサギの繁殖について。鳥, 91・92, 20—27.
- 松山資郎, 1932: ゴイサギの習性観察。鳥, 7 (33・34), 288—292.
- OGASAWARA, K.&ABE, K.&NAITO, T., 1982: Ecological Study of Grey Heron in Oga Peninsula, Akita Prefecture. J. Yamashina Inst. Ornith., 14, 232—245.
- 高橋一郎・堤 朗, 1986: 八郎潟干拓地におけるアカガシラサギ *Ardeola bacchus* の繁殖記録。生物秋田, 29, 32—34.
- 渡辺 央, 1977: 長岡市悠久山公園のサギ類集団営巣地。長岡市立科学博物館研究報告, 12, 47—60.
- 渡辺 央, 1982: 長岡市悠久山公園のサギ類集団営巣地における営巣数と巣の分布状態の経年変化。長岡市立科学博物館研究報告, 17, 26—32.



1. 第1地域の概観



2. 第1地域の林床部で落ちこぼれた餌を採食するゴイサギの成鳥と雛



3. 第2地域の概観



4. ゴイサギの巣(Aタイプ)



5. 樹冠で給餌中のゴイサギ